

2018年3月8日



第71号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その64

## 会津素子さん

『襤褸の旗』という不思議な縁

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

成田市議会議員・会津素子さんのホームページには1978年1月生れとある。だからその年の5月に開港した成田空港は、彼女にとっては幼い頃から普通にある地域の情景であり、20年にも及ぶ空港建設反対運動も「話で聴く過去の出来事」だったはずだ。それなのに彼女はなぜか「三里塚闘争の落し子」でもある地球的課題の実験村と出会い、かかわりをもつことになった。

2011年4月、東日本大震災と福島原発事故直後の成田市議選に立候補した会津さんは、「原発について討論したい」と申し入れてきた実験村の樋ヶさんと会った。樋ヶさんは選挙で唯一「脱原発」を掲げている候補者に、エネルギー問題での討論を持ち掛けたのだ。その縁で木の根のプール開きに招かれた彼女は、そこで反対同盟や新旧の支援者、そして実験村の人々と出会うのである。

「議会では私も変わり者だから」という会津さんは、「変わってるけど面白い人たち」と、時のたつのも忘れて話し込んだ。「多数派じゃないけど、社会の見方とか共感できたし、価値観も重なる。それでいて多様性があるって面白いじゃないですか」。この出会いが、「見慣れた地域の自然が壊されていく」現状を何とかしたいと立候補した会津さんに、漠然とだが、ひとつの道筋を見せることになったのかも知れない。



「自然破壊を何とかしたい」。そんな思いを会津さんが抱くようになったのは、青年海外協力隊として2年間、砂漠地帯のエジプトで過ごし、「成田の緑が恋しい」と帰国したときだった。恋しかった「成田の緑」は、開発という自然破壊でかつての面影を失っていた。「それなら、貴女も立候補しなさいよ」。会津さんの背中を押してくれたのは当時、緑の党の共同代表だった杉並区議の須黒さんだった。演劇をしていた頃からの友人で、そんな話をよくしてきた彼女に促されて講習会などに出席する中で、元参議院議員・中村敦夫さんのリーフレットに衝撃を受けたという。

でも中村敦夫さんの名前で私が思い出したのは、彼が参議院議員として「みどりの会議」を設立したこと以上に、1974年の参院選挙に反対同盟の戸村一作委員長が立候補した際、選挙キャンペーンとして上映運動が展開された『襤褸の旗』に彼が出演したことだった。1911年の大逆事件で刑死した幸徳秋水を演じた中村さんは、当時、テレビドラマ「木枯らし紋次郎」のヒットで、主役の三国連太郎さんに優るとも劣らない人気俳優だった。

それから40年以上の時を越えて、「開発という自然破壊」に異議申し立てをする地方議員がまたひとり実験村と出会うのだが、そのきっかけが『襤褸の旗』に出演した中村敦夫さんだったことに、ある感慨を抱かざるを得なかったからだ。

反対同盟の闘いが「開発という農地破壊」への抵抗であり、戸村選挙がその政治的異議申し立てだとすれば、会津さんは間違いなく「三里塚闘争の遺伝子」を受け継ぐ「新しい世代の地方議員」だと思うのだ。

(事務局・佐々木希一)

# 今なぜ自給農園なのかー石井恒司の農語り

日本消費者連盟の公開講座「土に生きる」2017年5月から

文責：大野和興

## ◆空港反対闘争と有機農業

私の生まれた世代はちょうど戦後のベビーブーム・団塊だんかいの世代で、親父から農業をやるもんだとずっと言われていたんですよ。若い頃は東京に出たいなと思ったりしていましたが、農村に生まれてしまったものですから、農業をやるしかないなということで、農業高校に進学させられました。

高校を卒業した18歳のときからずっと空港反対闘争に出ずっぱりでしたが、いまは一定の区切りをつけ、何のために自分は反対運動をやったのかという原点に帰って考えたり動いたりしています。闘争のさなかに有機農業を始めたんです。途中から、これはもう国家と徹底的に闘うしかないなと思い、そのためにどうしていったらいいのか、ということで。闘うのであれば、やはり自分の足もとを固めなければいけないという思いがあって、闘いをしながら農業みなまたをやっていく、それはどういう形なのか。当時は水俣病を引き起こしたチッソや昭和電工が作る窒素肥料を使って農業を展開していたんですよ。それはちょっとおかしいんじゃないか、ということを感じて、国家と闘う、あるいは大企業みたいなのと別のところでやっていこうと思ったら、有機農業しかないのかな、ということで始めました。

ワンパック野菜という産地直送を闘争仲間と始めて、会員が1500軒くらいまでいきました。現在は40周年になるんですが、かなり細々とといった感じで続けております。昔からの仲間に残っているのは3人だけ、あとは若い人たちです。若い人たちはほとんど都会の人たちなんですよ。10人ちょっとくらい。これから先は、若い人に考えてもらえればいなと。われわれが四の五の言うよりは、若い人がどうしたら農業を継いでやっていってくれるのかなと、そこが一番大事なんじゃないかと思っています。

## ◆農業は疲れる

農業というのは、自然を相手にしているわけですよ。太陽があって、大気があって、水があって、大地がある。その地球上の大循環の中で、農



業はやっていくわけで、自然の摂理を無視したところでは、基本的に農業は成り立たない。われわれが手をかけられるのは、せいぜい機械を投入するとか、人力を投入して野菜を品種改良するとか、そういう程度であって、作物はやはり年に一回しかとれない。

自然の厳しさを思い知らされながらやっていくのが農業で、基本はやはり畑に種を蒔かないと芽は出てこないし、日照りのときにはきっちり水をやっておかないと芽は出ない。水を撒かなかつたけど2日後に雨が降ることもあります。それはたまたまラッキーな話であって、明後日雨が降る予報でも、水を撒かなきゃいけないんですよ。それで予報通り雨が降ると、やはり無駄なことだったと思って、次には水撒きの手を抜くんですよ。するとやっぱり駄目。

人を相手にしていたら、話で誤魔化せる。でも種は正直だから水分がないと芽が出ないし、風が吹けば葉は縮れるし。葉が縮れたやつは育ちませんから、それで駄目になっちゃうわけですよ。自然の摂理を飛び越えてはいけない、そう思い知らされることの連続でした。

田んぼの中に入って田植えをしたり草取りをしたり、やはり疲れるんですよ。農業は疲れる、だから皆都会に出たい。それを最初からわかっていたから、私も都会に出たいなあと考えていたんだけど、やっぱり出られなかった。いくらかでも楽をしたいんですよ。楽をしたいんだけど、そ

このところだけでものを考えてはいけないなというのが、私がずっと学んできたことなんです。雨が降って、その雨が地中に染み込んで作物を育て、余った水は川に流れて、海に注いで蒸発して、また戻ってくる。そういう壮大なロマンを感じながら生きていけるなあというところまで来ました。それまではやはり、疲れることしか知らなかった。

逆に言うと、そういうことを思わなければやっていけないんです、疲れるだけで。一本100円の大根といっても、100円のものを作るんじゃなくて、人間の食べもの、自分が食べるものを作っている。100円というお金に換算しない考え方を自分の中で作っていかないとだめなんです。

#### ◆「安全・安心」を売り買いしていた

3・11の原発事故があって、風評被害というのがありましたね。それまでは「無農薬の安心な野菜を一生とり続けますよ」と言っていたのに、「おたくの野菜にはどれくらいセシウムあるんですか」みたいな話になっちゃって。ずっととって来ていた人がやめて、3分の1くらいなくなっちゃったんです。

やや、これはどういうことなのかな、と考えさせられたんです。つまり私らは「安心・安全」ということで野菜を売っていたにすぎないんだと、そういうことを思い知らされました。お金を出せば安心・安全を買えるという、この日本の現状って何なんだろうなあということをやっと考えた。お金で売り買いするだけではない、それ以外のもの何かあるのかなあと。それで自給農園ということを考え始めたんです。

#### ◆自分の食べ物は自分で作る

農村では農業をやる人がもういなくなっちゃったんですよ。だから都会の人に自分で野菜を作ってもらえばいいんじゃないかと。新しい農業展開として、自分の食べものは自分で作るということはどうなのかと。それが私のやっているミルパという「自給農園」です。私の家の前を開放して、都会の人がうちの畑に来て野菜を作る、農薬と化学肥料を使うのは駄目だよ、とは言いますが、まあ自分で好きなように、作ってもらおう。

うちのシステムは、会員さんに10平米くらいの小さな畑を持ってもらって、野菜を作ってもら

う、同時に「シェア畑」というのを設けて、会員さんと私と一緒にになって、個人畑で作らないものを作る。会員さんと一緒に作って、うちに来て自分で野菜を作りたいという人は自給してもらおうということだから、きっちり1人分賄えるように野菜作りを続けてもらうことで、ともかく手ぶらでは帰らない、持って行って頂けるというシステムでやっています。

ミルパという名前は、メキシコの持続可能な農法という意味です。トウモロコシと豆とズッキーニ、この3つの作物は全てそれぞれ持ち味が違います。トウモロコシは枯れると有機質として堆肥になって地力の足しになる。それに豆の蔓が絡んでいく。ズッキーニがお日さまから大地の水分の蒸発を防ぐ。これら3つを混植して畑で育てていくという農法なんです。これは持続可能というだけではなく、一番合理的な農法だと言われている。

自分で食べるものは自分で作る。等身大の生活をして、過度なことはやらないというふうにできればいいなと。

#### ◆焚き火小屋

小屋を一軒建てているんです、焚き火をしたいなと思って。ちょっと火を燃やして煙を出すと消防署からお達しが来ますよね。家の中から煙が外に出る分には問題ないんですよ。火を燃やして、ただぼうっとそれを眺めるだけというための焚き火小屋です。大工さんは頼みません。自分で今やっています。柱は山からとってきて、壁は竹を裂いて、泥壁という昔のやり方で考えています。火を燃やすという行為を通して、自分の中に何が欠けているのかなと、そういうことを考えながらうちで遊んでもらえればいいなと。そういうことを夢みて、小屋づくり、畑づくりをやっています。

私も69だから、あと何年もつかわからないけど。農業後継者がいない状態の中で、新しい農業展開というのかな、もうちょっと新しい農業形態をやっていきたい。これからの社会を農的社會に移行させたい。農村のあぜ道で大勢の人が、10時になったら、あるいは3時になったらお茶を飲んでいるところがずらっと見られるようになることが、私の夢です。

# 私たちの暮らしが海外で引き起こしていること 「プロサバナ計画」の現在

実験村の新年会でミニシンポ



今年1月21日、日本国際ボランティアセンターJ V Cの渡辺直子わたなべなおこさんに木の根ペンションに来ていただき、アフリカ・モザンビーク共和国でのプロサバナ計画の現状、新たな展開、われわれの課題などについて講演をお願いした。以下その要旨です。

## 三角協力

プロサバナ計画は日本・ブラジル・モザンビークの三角協力によるモザンビークの熱帯サバナ農業開発プログラム。対象の北部3州は日本の耕地面積の3倍の1400万ヘクタール。直接的には中小農民40万、間接的に360万人がひえき裨益すると称する。2009年9月に日本・ブラジル・モザンビーク3か国で合意した。

1970年代からブラジルで進められたセラード開発が、ブラジル南部のサバナ地域を耕地に変え大豆生産で世界2位、輸出で世界1位となっている。これを「成功事例」として、モザンビークの北部サバナ地域の辺境に展開しようという計画である。

計画を主導する日本の国際協力機構は、当初国内向けに「日本の食糧安全保障のため」としていたが、現地で小農民たちの抵抗運動がおこり、これを支援するJVCなどの国際的な市民活動からの批判にさらされるにつれ、「アフリカの食料事

情の改善のため」と支援の文脈で説明するようになっていく。全体計画のマスタープランづくりは2013年までに終える予定とされたが、今は止まったまま。現地の抵抗と、国際的な監視・抗議活動の成果と言える。

## 問題点

計画の問題点の第1は、対象地の大半を占める自給的な小農の実態や考えが反映されていないこと。熱帯サバナというが、年間降水量1200ミリとけっこう雨が降る。森林もあり小川が流れ水場もある。大規模灌漑は無いが、水を引いて多様な作物を作っている。近くにローカル・マーケットがあり、魚や芋・豆など売り買いする。食べるということから見れば豊か。ただ、移送手段を持たないので作った農産物を自分で売れず、必ず買ったたく仲買人に売ることになる。学校や病院は無いが、有っても医者や先生がいないという現実はある。それでも彼らは「農民は生命や自然、地球の守護者である」という誇りをもって生きている。「自分たちの農業の実態に合った発展を考えたい。投資を入れた大規模開発ではうまくいかない」と北部ナンブーラ州に暮らす小規模農民組織のリーダーのコスタ・エステバンさんは言っていた。

問題点の第2は、農民たちに情報が伝わらず、相談もないこと。JAICAや日本商社は日本・ブラジル国内、他先進国でプロサバナ計画への投資セミナーなどを開いているが、現地農民には知らせていない。ましてや相談もしない。コスタさんはJAICA・外務省に「我々の土地を開発するというなら、なぜ我々に説明し、意見を聞かないんだ」と抗議した。

問題点の第3は、現地ではすでに強制移住、土地取り上げの人権侵害が起きているが、外務省やJAICAは、「現地で人権侵害が起きているかどうか調べる立場にありません」とわれ関せずの

態度をとっていること。人権侵害の調査は現地政府・地方政府の仕事だというのだ。

### 抵抗運動の連携

こうした状況では、情報を共有したり状況を伝えたりする上で現地の抵抗運動とドナー国側の市民運動の連携が欠かせない。渡辺さんたちは現地で調査したうえ、協議の場や情報開示を求めたり、政策提言をしてきている。現地での土地取り上げや強制移住の実態を訴え続け、いま渡辺さんはモザンビーク政府から目をつけられて入国拒否の状態にあるそうだ。ブラジル・日本・モザンビークの市民運動の連携も深まっている。

### もうひとつの開発事業

J A I C A ・外務省へ開示請求権を使っのやり取りの中で明らかにされたのは、もう一つ別にさらに大規模な「ナカラ回廊経済開発事業」があること。インド洋に面したナカラ港を整備し、モザンビーク北部のプロサバナの3州に2州を加えた地域44万平方キロという日本の国土面積より広い地域の鉄道・道路を整備し、石炭採掘、天然ガス開発、植林事業、農業開発をおこなうというもの。2011年11月に日本とモザンビーク2国間で署名された。港湾や鉄道、道路は貨物需

要の見込みがないと投資が呼びこめない、このため大規模農業開発ははずせない。貿易のための開発、投資のための開発が、援助の名のもとにおこなわれている。

### 幸福のための発展

コスタさんは「モザンビークで起きていることは悲しみの開発です。あるいは犠牲を伴う開発だともいえるでしょう。私たちはそんな開発は必要ありません。私たちに必要なのは幸福のための発展です。あなたたちはそのためになにができますか?」と言っている。重い問いかけだと思う。

まとめ・平野靖識



### ～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

- 村民費 3000円
- 麦大豆畑トラスト 5000円
- 通信購読のみ 1000円

郵便振替 00140-3-92555 地球的課題の実験村

<問い合わせ> 電話/FAX 0476 (26) 1654 平野

メール: jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL: <http://yamasoft.jp/jikken-mura/>

# 「第3滑走路—空港倍増計画」が照らし出す格差の拡大

成田市東峰住民 樋ヶ守男

## ＜滑走路1本で15億円 地域間格差と対立の拡大＞

今回の空港倍増計画のミソは、既存のBと新設C、二本の滑走路の長さを超大型機用とし、風向きにあわせて、一つを着陸専用・もう一つを離陸専用にすることで飛行回数を倍増するという点にある。そのためにB滑走路を北側に1000メートル伸ばし、B南端から3325メートル南・東に420メートルの位置から南方向にC滑走路3500メートルを造ることになる。「独立運用」と聞こえはいいが、直下の集落からみれば、今は1時間37便が半分の離陸・着陸だけですむものを、毎時37便となる。飛び去った飛行機の騒音がおさまって1分半もすると次の飛行機の騒音が襲う。こんな状態がB両滑走路ではざくっといって現在より南に約7キロ、北に約1キロ広がるのだ。

さらに国と空港会社は現在原則的に6時から23時までの飛行時間を早朝5時から深夜1時まで拡大し、C供用まではA滑走路に限り24時まで運用、便数制限も撤廃しようとしている。現在は22時台10便限定が、22時23時台6便まで飛ばせることになる。

騒音被害の増大にもかかわらず、南側の<sup>しばやま</sup>芝山町当局は賛成・推進の立場をとり、その南の<sup>よこしばひかり</sup>横芝光町は住民の反対多数で、町当局も立ち往生状態である。芝山町は空港用地となることで、多額の固定資産税が毎年入ってくることになる。滑走路だけでも15億円といわれ、「町づくりの原資ができるわけです」と芝山町長がNHK報道番組でも力説している。それに対して「横芝光町は騒音だけ。町にとっていいことは一つもない」のである。

現空港の9割以上の施設は成田市にあり、固定資産税や周辺対策交付金のほとんどは成田市に入る。ホテル・商業施設・関連企業や住宅地、鉄道・高速道路など、「空港の開発利益」は東京圏側・西側の成田市・富里市にほぼ集中している。「表側の光」が飛行便数増大につれて明るくなるのに比べて、東側南側の芝山町・横芝光町・<sup>たご</sup>多古町などは「裏側の影」が増すばかり。騒音迷惑料や交付金が入ってきたとしても、使う用途も限られ、失われる地域生活の「豊かさ」を補うことはできない。教育や医療など民生にはほとんど使えないのだ。騒防法・騒特法は住民への被害補償と同時に人口流入・土地利用規制法でもある。すでに町の3分の2が騒音下にある芝山町は開港以来人口が減少、小学校も次々となくなり、唯一の町の診療所も閉ざされて久しい。だから今回芝山町は、町を空港施設に変えることで、「表の光」を夢見ている。かわりに、今の芝山状態が主に横芝光町に転嫁されるわけだ。

## ＜国に毎年90億円近くの「納付金」 空港の仕組みを変え、地域間格差・対立の解消を！＞

だが、少し待って欲しい。「空港の倍増」や騒音被害の拡大を前提にしなくても、「町づくりの原資」は現空港にすでにある。下の表はNAAの「連結決算推移（民営化以降 単位：億円）」である。右端の「親会社株主に帰属する当期純利益」のうち、3分の1は規定により、現在100パーセント株主である国に納められる。2017年度の予想は純利益294億円、国に98億円が入ることになる。

成田空港は地域住民の多大な犠牲の上に建設され、日々地域住民の騒音被害の上で運用されている。それなのに国が株式を独占し、その利益も独占するのはおかしいだろう。地域は少なくとも国と対等な株主であってしかるべきだろう。そうでなければ、地域は空港会社のおこぼれをあてにするだけの従属者になってゆくだけだ。千葉県や9市町はいたずらに空港を拡張することばかり考えるのではなく、国やNAAと違う立場で、空港をめぐる法的・経済的・社会的仕組みを組み直し、「地域・住民と空港の共生」の道を探り直すべきではないだろうか。

2018/2/15記

国、NAAの新たな提案	①夜間飛行制限緩和案の改善 C滑走路完成後のスライド運用で滑走路ごとの運用制限時間を7時間とし、静穏時間を維持
	②騒音対策の拡充 (飛行コースに挟まれた)谷間地域で寝室の内窓設置や壁・天井の防音工事
	③移転対象などの区域設定 地域の实情に最大限配慮するよう調整
	④移転用地確保への協力 地権者の意向を踏まえ、関係市町とも相談
	⑤具体的な地域振興策の推進 県の基本プラン実現に最大限協力
	⑥周辺対策交付金の充実 交付総額を現在の1.5倍に増額

## 6. 連結決算推移（民営化以降）

単位：億円 ※単位未満切捨て

	営業収益	営業利益	経常利益	親会社株主に帰属する当期純利益
2005年度	1,712	420	320	147
2006年度	1,843	333	238	117
2007年度	1,998	328	235	109
2008年度	1,894	234	141	59
2009年度	1,798	213	125	60
2010年度	1,878	320	234	99
2011年度	1,735	213	131	35
2012年度	1,892	347	275	153
2013年度	1,994	398	333	199
2014年度	2,031	387	333	196
2015年度	2,184	433	385	242
2016年度	2,174	414	372	253
2017年度（予想）	2,273	385	346	294

## ✉ 村民からの手紙 ✉

今年も冷え込み厳しいこの季節に、味噌の仕込みの連絡が届きました。20年前、石井恒さんが力強くペシッ、パシッと大桶に仕込んでいくのに遅れまいと丸めて手渡してから、毎年いただいています。成田の大地の人参を初めて口にした時、甘く柔らかく重量感があり、これが根菜？ まるで果物だ、と思った食感を今でも身体が憶えています。

映画製作の現場を知りたいと映画美学校ドキュメンタリーワークショップに入り、初めてデジタルカメラを手にして成田空港ツアーに参加して伺ったのが最初でした。現地で思ったのは「ナリタは農と工の接点だ」ということでした。以後、土日を利用して少しずつ寄り寄り、親しくしていただきカメラを回しました。講師の佐藤真さんから「何も撮れていない」と批判されても、半分は成田は恐くてカメラを向けられないのでした。

「2002年のサッカーワールドカップの陰に隠れて、円卓会議で作らないとした滑走路を作ろうとしていますかどう思いますか」とあちこちでインタビューし皆逃げられる中で、空港で連休の取材中だったカメラマンが「国が一度決めたことはどうしようもないでしょう。沖縄がそうでしょう」と答えてくれ、深く考えさせられました。

映画は完成し、「ナリタ、私の裸の王様」は2002年1月に渋谷ユーロスペースでレイト



ショー公開出来ました。いつも機動隊がいて近寄り難かった家があり、「私のところも取材してほしい」と書かれたアンケート用紙が印象に残っています。

「反対している農家が1軒でもあるかぎり成田空港は使わない。小川伸介の三里塚シリーズに触発された一人の主婦は心密かにそう誓う。しかし闘争から30年、今や小川プロのスタッフですら成田空港を使っている。主婦は憤懣やるかたなく聖地へと踏み込むのだが……。」の佐藤さんのコメントに、私としては主婦の作品ではないことを証明しようと、その後も撮りためた映像を眠らせているうちに、オリンピックに隠れて3本目の滑走路が浮上しています。心は地球上の「農と工の接点」ナリタと共にありたいと思っています。

藤本美津子

### 緊急追記

## 行政当局だけで「地元合意判断」「空の代執行」迫る

2月19日、成田市など9市町による「成田空港圏自治体連絡協議会」は、国・NAA・千葉県らの「機能強化」第3案を受け入れ、今年度中の「地元合意」判断へと動きだした。

第3案は、「スライド運用7時間」、「谷間区域も防音工事」とか、「周辺対策交付金を現在の40億円から60億円と1.5倍にして用途も広げる」など、地域に「譲歩」したかのようだ。が、夜間の静穏時間は4時間のまま、1分半ごとの騒音襲来、そしてA滑走路で夜間飛行時間の延長と便数制限の撤廃を先行実施するなど、基本的なことは変わっていない。つまり防音工事や交付金など「金で解決できる要望」に応えても、住民の健康や集落の存続といった「地域の生存」にかかわることには応えていない。これでNAAと各行政当局だけの「四者協」=住民不在、非公開の場で「地元合意」が得られたと判断するつもりらしい。

新聞記事は2月20日、東京新聞千葉中央版より

# 年次寄合のお知らせ

トラスト運動の新しい活力のために

今年の冬は、記録的な大雪や強い寒波の影響で野菜の収穫がままならず、おかげで価格も軒並み高騰し、献立に頭を悩ますことが多くありました。とくに東京都内は、近県の単一作物量産地への依存度が高いので、入荷量の減少は仕入れでの「奪い合い」となり、価格の高止まりが長引くことになったようです。

こんなときは、生産者との年間契約で仕入れをする生活協同組合の品物が、比較すれば安価になって「お得感」があるのですが、今年は思うような収穫がないため「欠品」が相次ぎ、結局はお店で400円もするキャベツを購入するかしかなかったりませんでした。

そんな厳しい寒さもようやく緩みはじめ、実験村の年次寄合の季節になりました。

ここ1～2年、実験村の3つのプロジェクトのひとつ「麦・大豆畑トラスト」は、村民の世代交代もあって様々な問題に直面してきました。ひとつは大雨や台風の影響と畑仕事への参加者の減少で麦の収穫がほとんどできず、もうひとつは手作り味噌の麴をどう調達するかという問題です。

とりあえず麴は、知人から購入して味噌づくりをつづけるという提案をさせていただきますが、畑仕事への参加者を増やす方策は、なかなか良い知恵がありません。当面は、トラストの管理者に集中している仕事―畑の管理のほかに参加者の受け入れや金銭管理―を分担しようと、様々な人々の協力を仰ぎながら相談を進めていますが、村民の皆さんの一層のご協力をお願い致します。

また今年は、共同代表の柳川さんと石井さん、そして小松さんの3人が古稀を迎えます。年次寄合の終了後、場所を移してお祝いをする予定ですので、できるだけ多くの村民の皆さんにも参加していただきたいと思います。

(事務局・佐々木希一)

日時：4月8日 日曜日  
午前11時から  
会場：夕立の森  
芝山千代田駅から徒歩15分

## 活動報告と来年度の予定

北総大地夕立計画 平野靖識

引き続き杉林の間伐と下枝払いが作業の中心となります。

芝山町・小寒田<sup>こがんだ</sup>にある里山を山主の三ノ宮廣さんから借り、「夕立の森」と名付けて月一度の活動を始めて19年がたちました。荒れた里山の再生が目的です。はじめ篠竹や根笹が密生し、もとの杉林の杉はほとんどが台風や雪のために折れたり立ち枯れたりしていました。いまこの森の片づけは終わり、残した実生の若木が成木に育って夕立の森を覆っています。

今年度は向かいの杉林の間伐にも取り組みました。7月、まず手始めに細い杉10本を切りまし

た。慣れるに従いだんだん太い木に挑戦し、少しずつ手際もよくなってきました。樹冠が払われるとそこの空が抜け、林床に光が届きます。作業が進むにつれ少しずつ林内が明るくなり、この作業は結構達成感がありました。まだ間伐が済んでいないので下枝払いまで進んでいません。来年度は間伐を済ませて下枝落としに進みたいと思っています。

里山での一日きこりの作業はいろいろなレベルがあるので誰でも参加できます。作業などせずに、スケッチしたり、本を読んだり、もいいです。

今回は3月18日(第3日曜)の予定。里山の空気を吸いに来てください。

■編集・発行／2018年3月8日「地球的課題の実験村」  
■購読料／年間1,000円(年3回)

■71号編集担当／佐々木希一・平野靖識  
■共同代表／柳川秀夫 千葉県山武郡芝山町香山新田22  
大野和興 埼玉県秩父市大宮5734-4